

## 1 狂犬の死に寄せる哀歌

お集まりの 善良な皆の衆  
わたしの歌に耳をお貸しくださませ  
それは まことに短い歌<sup>はなし</sup>  
ながくは お引きとめいたしません

イズリングトンの町に ひとりの男が住んでいました 5  
男のことを 世間では  
いつも教会に通<sup>かよ</sup>って 祈りを忘れない  
信心深い男 と申しておりました

心はやさしく 親切で  
敵も味方も区別なく 救いの手を差しのべました 10  
毎朝 自分の服を着るときは  
裸の者にも かならず衣服を施<sup>ほどこ</sup>しました

その町に 犬が一匹やって来ました  
町にはすでに 犬がたくさんおりました  
雑種に ペットに 子犬に 猟犬に 15  
それに 性質<sup>たち</sup>の悪い野良犬まで

その犬と男は はじめ仲の良い友達でした  
ところが犬は あるときかっとう血がのぼり  
自分の密<sup>ひそ</sup>かな欲望<sup>ねが</sup>を叶<sup>かな</sup>えるために  
狂<sup>か</sup>って男に噛みつきました 20

町の 四方の通りから  
驚いた近所の衆が駆け寄って  
こんなに立派な男に噛みつくなんて  
気違い犬め<sup>ののし</sup> と罵りました

キリスト様の信者の自には 25  
噛まれた痕<sup>あと</sup>は深く 重傷でした  
みんなは その犬を狂犬だと罵って  
男はきっと死んでしまう と言いました

ところがやがて 奇跡が起こり  
町の下衆もが言ったことは 嘘八百という始末  
その男の噛まれた傷は 回復し  
死んだのは 犬の方だったのです

30

(山中光義訳)